袖ひちて

こまつ　ひでお

0

『古今和歌集』所載の和歌を解釈するためには，個々の用語の意味・用法に細心の注意を払うとともに，この時期の和歌に特徴的な，複雑に構築された表現を，作者によつて意図されたとおりに解析しなければならない。この小論は，その方法がいかにあるべきかの模索として試みられた一連の解釈作業の一つである。ここには，つぎの１首を取り上げて，問題を提起してみたい。

春立ちける日　詠める　　紀　貫之
袖ひちて掬(むす)びし水のこほれるを　春立つけふの風やとくらむ〔春上・２〕

1

「古年に春立ちける日，詠める」という詞書を添えた冒頭の和歌は，名（立春）と実（新年）とをともにそなえたほんとうの春の訪れを待ち焦がれる落ち着かない気持を表明して，以下に続く「春歌」への序奏の役割を果たしている。それに対して，「春立ちける日，詠める」という詞書は，立春の到来にすなおな喜びを表明した作品であることを明示している。この詞書は，編纂された歌集の全体的な文脈の中で機能しているから，第３句「春立つ今日の」との重複は問題にならない。なお，この和歌のこころを読み取るうえで，当時における「春立つ」という表現の内包を理解することが極めて重要であるが，その点については第27節に述べることにする。

2

この和歌の場合，著名な作品であるばかりに，必ずしも正統な手順を踏まない独断的な解釈も世上に少なからず流布しているようなので，まず，現行の注釈書の中から普及度が高いと思われる４種を選び，刊行順にそれらの口語訳を

引用してみる。ほかの注釈書の口語訳も大同小異の水準にあるといってよい。相互に比較してみると，下の句よりも上の句の方が，いっそうまちまちになっている。なお，注釈書の書名は省略する。

① 暑かった夏の日に，袖の濡れるのもいとわずに，手にすくって楽しんだ山の清水――それが寒さで凍りついているのを，春立つ今日の暖かい風が，たぶん今ごろ解かしていることだろう。

② 袖がつかって両手ですくった水の，氷っているのを，春が立つ今日の風が今ごろは解かしているだろうか。

③ 暑いさなか，袖が濡れんばかりにして，手ですくった，あの山の清水が冬には凍っていたのを，今日，この立春の風がとかしていることだろうよ。

④ 夏に袖を濡らしながら両手ですくった水が，秋も過ぎ，冬になって凍っていたのを，立春の今日の風が解かしていることだろうか。

この程度の口語訳なら，知らない語句を辞典のたぐいで調べ，多少の潤色を施すだけで，だれにでも簡単にできてしまいそうであるが，第1句の理解のしかただけをみても，すべて同時に正しいことはありえない。また，下の句において，風が氷を解かしているだろう（か）というのはともかくとしても，解かしていればどうなのだ，と問い返されたら答えに窮せざるをえないであろう。このようにあやふやな理解のもとに作品の鑑賞や批評をしてみたところで，あまり意味がなさそうである。作者が，用語や表現に細心の注意を払い，技巧を凝らしてこの和歌を練りあげたはずだという前提で考えるとしたら，皮相な理解に満足することなく，その奥にあるものを探ってみることが必要であり，また，そのための方法がなければならない。

ちなみに，第1句について，＜知らず知らず袖がぬれながら＞といった不自然な表現の口語訳を与えている注釈書もある。②もそれに近い。こういうたぐいは，言語感覚が正常でないという意味において，まず，ふるいにかけられなければならない。

前代の注釈の代表として，本居宣長の『古今集遠鏡』にみえる「俗言」による「訳」をつぎに挙げておこう。

○袖ヲヌラシテスクウタ水ノコホーツテアルノヲ　春ノキタ今日ノ風ガフイテトカスデアラウカ（ちんや）

あとから刊行された注釈書の口語訳に――ということは，その背後にある解釈に――，進歩の跡が認められない。

3

藤原定家の自筆本においては，第1句「袖ひちて」の「ひ」の仮名の左下と「ち」の仮名の左上とに，それぞれ，朱の単声点が加えられており，これによると［○●］というアクセントで「ヒチ（テ）」になる。

袖ひちて

これらの声点は，校訂作業の一環として，定家によって加えられたものであるから，この歌集の復元された形だけを関心の対象とするならば，当然，声点は挟雑物として排除される。しかし，研究の足場を固めるために，まず，依拠する伝本を徹底的に理解してかかろうと考えるとしたら，価値づけが別になる。ついでに言い添えるなら，原本においては和歌がすべて草仮名で記されていたはずなので，伝本の漢字を仮名にもどして——10世紀初頭の文献であるから，48種の仮名に書き換えて——，考えるのが第一の立場であるが，第二の立場からは，この文献に表記されているその形によって，まず，検討してみるべきことになる。

藤原定家は，みずから校訂した本文が誤写や誤読される可能性を封じるために，表記のうえでさまざまな工夫を試みており，『古今和歌集』の場合には，解釈を確定的に提示するための手段としての声点を加えることを前提に本文が整定されている。それらは，文字とともに本文の integral な構成要素の一つであるから，第二の接近のしかたをとるとしたら，それらも一次的な研究対象に含まれる。したがって，ここにおけるわれわれの課題は，定家が，はたして，どのような意図のもとに，「袖ひちて」の「ひち」の部分に声点を加えたのかを——換言するならば，それを加えておかないと，どういう不都合を生じる可能性があったのかを——解明することにある。

4

藤原定家の『僻案抄』の内容は，主として，『古今和歌集』の定家自筆本で声点や合点が加えられている語句についての解説であって，この「袖ひちて」という個所に関しては，つぎのように説明されている：

> ひちてとは浸してといふ心なり。この詞，昔の人，好みて詠みけるにや，古今には多く見ゆ。後撰には少なし。今の世の歌には詠むべからずとぞいましめられし。

ある語句や表現が注釈の対象になっているのは，それが，すでに分からなくなっていたことの証拠である。作品の成立時期に近いほど，その意味が究明しやすかったはずであるとは，必ずしもいえない。そうだとしたら，はたして，

いかなる根拠に基づいて，「ひちてとは浸してといふ心なり」といっているのかが問題である。ここにいうように，「袖ひちて」が，<袖を浸して>という意味であれば，和歌の脈絡はよく通じる。しかし，それは，脈絡が通じることばとして，<浸して>を持ってきたためではないかと疑ってみることも必要である。われわれとしては，さしあたり，この説明を参考程度にとどめて，独自に考察を進めなければならない。その結果が，やはり，<浸して>になったとしても，確認のための作業が無駄になるわけではない。

5

「袖ひちて」の意味を明らかにするには，まず，『古今和歌集』において，この動詞がどのように用いられているかを調べてみなければならない。

『僻案抄』に，「古今には多く見ゆ」とあるが，定家本によると総数は7例である。「袖ひちて」の和歌を除いて，残りの6例を列挙してみる：

声はして涙は見えぬほととぎす我が衣手（ころもで）のひつを借らなむ

［夏149・詠人不知］

七日の夜の暁に詠める　　源宗于朝臣

今はとて別るる時は天河（あまのがは）渡らぬさきに袖ぞひちぬる［秋上・182］

夢路にも露や置くらむよもすがら通へる袖のひちて乾かぬ

［恋2・574・詠人不知］

音（ね）に泣きてひちにしかども春雨に濡れにし袖と問はば答へむ

［恋2・577・大江千里］

かの女に代はりて　返事に詠める　　業平朝臣

浅みこそ袖はひつらめ　涙河　身さへ流ると聞かば頼まむ［恋3・618］

秋の野に笹分けし朝の袖よりも逢はで来し夜ぞひちまさりける

［恋3・622・業平］

『後撰和歌集』の収録和歌は『古今和歌集』より300首ほど多いにもかかわらず，「後撰には少なし」と『僻案抄』にあるとおり，定家本ではこの動詞が4例しか用いられていない。ここには，詞書を省略して引用する。

いさやまだ人の心もしら露のおくにも外（と）にも袖のみぞひつ

［恋5・964・詠人不知］

武蔵野は袖ひつばかり分けしかど若紫は尋ねわびにき

［雑2・1177・詠人不知］

滝つ瀬にたれ白玉と乱りけむ拾ふとせしに袖はひちにき

［雑3・1235・詠人不知］

よそにをる袖だにひちし藤衣　涙に花も見えずぞあらまし

［哀傷・1418・詠人不知］

これら二つの歌集を通じて合計11例の，そのすべてが「袖（衣手）」との結び付きで用いられている。そのほかの文献にみえる例のほとんども，「袖」と結び付いた類型的な表現になっているから，「ひつ」は，和歌において，かなり用域の限定された動詞であったことが分かる。つぎの例は，「袖」と結び付かない，数少ない例外の一つである。

水上（みなかみ）にひちて咲けれど　菊の花　移ろふかげは流れざりけり

［貫之集・464］

『拾遺和歌集』にもこれと同じような使いかたの「ひつ」が見いだされるが，それについては第10節で考える。

6

前節に引用した諸例から帰納して，動詞「ひつ」は，＜濡れる＞というような意味とみなしてよさそうであるが，ここで注目されるのは，１首の中に「ひつ」と「濡る」とを用いた「音に泣きて」［577］の和歌である。「ひつ」の意味を「濡る」との対比において明らかにするうえで，この和歌は重要な手がかりを与えてくれる。

＜声をあげて泣いたその恋の涙のために袖が「ひち」てしまったけれど，恋人に尋ねられたら，春雨に「濡れ」たのです、と答えることにしよう＞といった趣旨であるが，この場合，「ひつ」と「濡る」との関係には，いくつかのありかたが想定される。

その一つとして，同一の語の重出を回避するための言い換えの可能性が考えられるが，『古今和歌集』の「浅みこそ」の和歌は，その当否を検証するために恰好の例である。これは恋歌に対する返歌であるから，対になる男性の作が先行している。ここに，その贈答歌を対比してみよう。男性が「袖のみ濡れて」といっているので，返歌の方で，「袖はひつらめ」と言い換えているとみれば，両者の関係は，使われた順序が逆になっているだけで，原理的に「音に泣きて」の和歌の場合と同じことになる。

業平朝臣の家に侍りける女のもとに詠みて遣はしける　敏行朝臣

つれづれのながめに増さる涙河　袖のみ濡れて逢ふよしもなし

［恋3・617］

かの女に代はりて　返事に詠める　　業平朝臣

浅みこそ袖はひつらめ　涙河　身さへ流ると聞かば頼まむ［恋３・618］

定家自筆本では，上引のように，617番が「袖のみ濡れて」となっているが，元永本その他，いくつかの古筆切や，『伊勢物語』の定家自筆本（天福本臨写）では，対応する部分が「袖のみひちて」という形である。この事実は，「濡る」と「ひつ」との互換可能性を保証しているようにみえるが，検討を打ち切ってしまうには，まだ，不安が残されている。それは「春雨に」の和歌をつぎのように言い換えて，まったく等価だとは言いきれないからである。

音に泣きて濡れにしかども春雨にひちにし袖と問はば答へむ

ほんとうは，ぐっしょり濡れているのだが，春雨にほんのちょっと濡れただけです，といってごまかしておこうというのが作者の真意であるとしたら，「ひつ」と「濡る」とでは，濡れかたの度合にかなりの差があったと考えなければならない。そうだとしたら，上のように言い換えたのでは，ごまかすどころか，逆に，その濡れかたを誇張したことになってしまう。春雨は軽い降りかただという通念があるので，これは明らかに不自然であろう。

つぎの和歌の場合にも，作者が雨でびしょ濡れになったとみるのは大袈裟である。この歌集の「濡る」については，いずれもこれと同じとみておいてよさそうである。

三月の晦日（つごもり）　雨の降りけるに　藤の花を折りて人に遣はしける

業平朝臣

濡れつつぞしひて折りつる年のうちに春はいくかもあらじと思へば

［春下・133］

7

濡れるのと，びしょ濡れになるのとは，事実として連続していても，とらえかたとしては，――したがって，表現のしかたにおいては――，不連続である。そのつもりで，さきの贈答歌における「濡る」と「ひつ」との使われかたを再検討してみよう。

恋歌の贈答では，相手の誠意に懐疑を表明したり，懐疑的であることをよそおったりする場合が多く，したがって，相手のことばじりをとらえて，誠実さを疑ったり，はぐらかしたりするのは，一つの型になっている。敏行朝臣の和歌には，用語や表現のうえで，相手につけこまれるような隙があったために，こういう返歌が作られたと考えてよい。

<袖だけびしょ濡れだというのは，涙の川が浅い証拠です。流す涙で体まで流れるということなら，あなたの真心を信じましょう>というのが返歌の趣旨であるから，617番の和歌で問題になるのは，まず，「袖のみ濡れて」の「のみ」である。作者の意図としては，<あなたにお目にかかりようもないままに，袖がどんどん濡れていくばかりです>というつもりであるが，返歌では，それを<濡れているのは袖だけで〜>という意味に曲解して，いいがかりをつけている。そのうえ，「袖のみ濡れて」の「濡れて」もまた，つけこむ隙を与えている。<涙河の水が増しているといっても，袖が僅かに濡れる程度で，びしょ濡れになるほどには増していない>と曲解できるからである。

返歌が「袖は濡るらめ」となっていれば，いっそう強い皮肉になるが，「涙河」の浅さに言いがかりをつける都合上，相手が浅瀬に立っていると想定しなければならない。流れが袖を濡らすとしたら，その濡れた部分はびしょ濡れになるので，脈絡上，「ひつ」を用いざるをえなかったのであろうか。敏行朝臣が617番の和歌を作った時点では「袖のみ濡れて」という状態であったが，今ごろは「浅みこそ袖はひつらめ」という程度までに増水しているだろうと，時間の経過を計算に入れて表現したという解釈も可能である。

このように考えるなら，617番の第3句は，「袖のみひちて」よりも，「袖のみ濡れて」とあった方が，皮肉な理解を誘う不用意な表現になるから，返歌との対比においていっそうおもしろいが，さきに指摘したように，「ひちて」となっている伝本もある。一方は意図的に改変された形に相違ない。一対の贈答歌における用語上の不整合を是正しようとして，「袖のみ濡れて」が「袖のみひちて」と書き変えられたものであろうか。

書写ないし校訂をした人物としては正しい形に戻したつもりでも，実際には，読みの浅さのために本文を改悪してしまっている場合がしばしばあり，ここも，そういう例の一つとみなすべきかもしれない。定家が本文の整定にあたって，「袖のみひちて」という形の本文にも目を通していながら，「袖のみ濡れて」の方を採用していることは，かれの読みの深さを物語っているといってよさそうである。ただし，さきに指摘したとおり，同じく定家の校訂になる『伊勢物語』には「袖のみひちて」とあり，『古今和歌集』における逆方向の改善の可能性も考えられるので，不透明な部分が残らざるをえない。

8

「濡る」「ひつ」の類義語として，「そほつ」がある。『古今和歌集』の和歌にはこの動詞が5個所に使われているが，つぎの例はその典型的な用法の一つである。

明けぬとて帰る道にはこきたれて雨も涙も降りそほちつつ

［恋3・639・敏行］

もう夜が明けているというので女性のもとから悲しい気持で帰る道すがら，ひどい雨にあい，涙と雨との混じったしずくが，まるで，しごき落とすように垂れ落ちた，ということである。

雨そそきもなほ秋の時雨（しぐれ）めきてうちそそけば，『御笠さぶらふ，げに木の下露は雨にまさりて』と聞こゆ，御指貫（さしぬき）の裾はいたうそほちぬめり

［源氏・蓬生］

ここも，裾からしずくが垂れ落ちているようすをいったものであろう。つぎの例のように，文脈からは「ひつ」との差がそのままには読み取りにくい場合にも，やはり，「ひつ」で表現されるより，いっそうひどい濡れかたをしているとみておきたい。

限りなく思ふ涙にそほちぬる袖は乾かじあはむ日までに

［離別・401・詠人不知］

「ひつ」と「そほつ」との意味領域が接近しているので，これら二つの動詞の間に，音数律による制約を調整できる程度の互換可能性があったのではないかという疑いが残るが，ひとまず，これまでの検討の結果をまとめてみると，和歌における「濡る」「ひつ」「そほつ」の関係は，つぎのようになる：

濡る・・・濡れる。さほどひどくない程度についていう。

ひつ・・・水びたしになる。あるいは，それと同じ程度にびしょ濡れになる。

そほつ・・衣服からしずくが垂れ落ちるほどひどく濡れる。また，衣服がひどく濡れてしずくが垂れ落ちる。

和歌や和文の範囲でみると，「ひつ」「そほつ」は，衣服についていった例がほとんどを占めている。現代語においても，＜びしょびしょになる＞とか，＜ぐしょぐしょになる＞とかいうのは，もっぱら，衣服についての表現であって，一般的には，いっそう用域の広い＜濡れる＞を，必要ならば副詞を添えて用いていることが思い合わされる。

9

以上の検討の結果によると，「ひつ」は<びしょ濡れになる>という意味であったらしい。

したがって，「袖ひちてむすびし水」は，水をすくい取るときに袖がびしょびしょになったこととして理解できる。ただし，そうなると，「ひちてとは浸してといふ心也」という『僻案抄』の注釈の当否があらためて問題になってくる。すなわち，「ひちて」とは，<濡れて，浸って>なのか，あるいは，<濡らして，浸して>なのかということである。

『僻案抄』の表現からは，動詞「ひつ」の意味が「浸す」と同義として一般化されているように読み取れるが，これは，「袖ひちて」の和歌に密着した注釈であって，「音に泣きてひちにしかども」[恋２・577)] のような用法まで，すべて「浸す」で覆ってしまうつもりはなかったであろう。この和歌の場合，流した涙が川や池になって，それに袖を浸したというほど大袈裟ではなく，袖がびしょ濡れになっているという程度の解釈で十分であるし，定家も，そのように考えたはずである。

「袖ひちて」の例をさしあたり保留するとして，ほかの諸例は，すべて，<びしょ濡れになる>という意味で一貫した理解が可能のようにみえる。しかし，定家が，自動的な表現と他動的な表現との違いに無神経であったとは考えにくいので，「ひちてとは浸してといふ心也」という説明には，それなりの心くばりがあったとみるべきである。

10

この動詞の語形は，賀茂真淵以来，<泥>の意の「ひぢ」と結び付けて，[ヒヅ] とみなされてきたが，山内洋一郎によって，[ヒツ] であったことが証明されている。以下に述べるように，これと対になる動詞との関係づけからいって，[ヒヅ] ではありえないが，いまだに「ひぢて」としている注釈書もある。研究の動向に対する無関心は責められるべきであるが，濡れかたのひどさを感覚的に喚起する点において，「袖ひちて」より「袖ひぢて」の方が受け入れやすいという事実も無視できない。

この動詞の語形が [ヒチテ] であったことの証拠の一つとして，図書寮本『類聚名義抄』の「漬」字（水部）の和訓「ヒチテ」に加えられた《平平上》の声点（いずれも単点）があげられている。「ヒチテ」の右下に「集」という略号が記されているが，これは，その直前の和訓「ヒタス」とともに，『白氏

文集』の訓点本の傍訓を引用したものである旨の表示である。

この字書は，言語資料として極めて信憑性の高い文献であるが，和訓の仮名に加えられた声点を，加点された当時の清濁を知るための根拠とするには，それなりの用意が必要である。漢字に添えられた和訓は狭義の文脈の中に置かれておらず，しかも，その文字の意味を知らない利用者によって検索されるものであるから，この字書の場合，確実な同定を保証するために，濁音仮名には複点が高い比率で加えられている。しかし，複点の加点が可択的であるという事実に変わりはない。すべての単点を清音として処理したとしても正しい帰結に到達する確率は高いが，厳密にいうなら，「ヒチテ」の「チ」の仮名に加えられている単点は，その音節が清音であったことの絶対的な証拠にはなしえない。しかも，この場合，「水」部に多数の和訓がありながら，「ヒチテ」(ヒツ)がただ1例しか見いだされないのも気がかりである。そのことについては，第15節に触れることにする。

図書寮本『類聚名義抄』において，「ヒタス」と「ヒチテ」とは一対の和訓として併記されている。この事実は，「ひつ」と「ひたす」とが，「朽つ」と「朽たす」，「果つ」と「果たす」などと併行する関係にあったことを示唆している。「ひちて」の「ひ」の仮名が清音であったことは，声点を証拠にあげるまでもなく，それが「ひたす」と対をなしている事実から確実に推定可能である。これらの関係を自動詞・他動詞という用語を用いて示せばつぎのようになる。

ひつ・・・・自動詞　＜浸る・濡れる＞

ひたす・・・他動詞　＜浸す・濡らす＞

「ひつ」と「ひたす」との関係をこのようにとらえるなら，つぎには，「ひたす」と対をなすところのもう一つの自動詞「ひたる」の用法に関しても検討してみなければならない。それを明らかにするうえで，『拾遺和歌集』にみえるつぎの例は貴重な手がかりである。

五条の内侍のかみの賀の屏風に　松の　海にひたりたる所を　　伊勢

海にのみひちたる松の深みどりいくしほとかは知るべかるらむ［賀・457］

海水に浸りつづけている松は，海のみどりにいくたび染められたか分からないほど深いみどりの色をしている，という趣旨の和歌であるが，詞書の方は「ひたりたる」，和歌の方は「ひちたる」になっている。いずれも，めでたい屏風絵に描かれた松の，同一の状態を指しているから，事実上，これら二つの動詞は同義であったと認めてよい。

第13節に述べるように，『万葉集』では，「漬」字が伝統的に「ひつ」と訓じられているが，「ひたる」の用例は指摘できない。平安時代の和歌においても，それらは同様の分布を示しているから，「ひつ」は和歌の用語であり，「ひたる」は日常語だったとみなすべきもののようである。そうだとすれば，上の例における二つの動詞の分布も，文体による使い分けとして説明できる。「ひつ」「ひたす」の対が成立して以後になって，使役（他動）の「～す」と自発（自動）の「～る」との対比によって「ひたす」から「ひたる」が造られたが，文章語としては散文に限られていた，といった事情が想定される。

藤原清輔の『奥儀抄』では，『拾遺和歌集』のこの和歌の「ひつ」について，つぎのように説明されており，それ以後は，おおむね，「ひたる」という意味として理解されるようになっている。清輔も定家も，和歌の用語としての「ひつ」に「ひたる」あるいは「ひたす」を当てて説明していることは，それらが日常語であったことを意味している。

ひつとは　ひたるといふ也　万葉集には漬とかけり　つく・ひたる同心也

11

これまで考察の対象としてきたのは，連用形が「ひち（て）」の形をとる動詞についてであるが，これとは別に，連用形が「ひて（て）」の形をとる動詞も使われている。よく知られているのは，『土佐日記』にみえるつぎの例である。なお，2月4日の和歌の第3句には，普通名詞の「泉」と地名の「和泉」とが重ねられている。

手をひてて寒さも知らぬいづみにぞ汲むとはなしに日ごろ経にける

［2月4日］

天雲のはるかなりつる桂川　袖をひてても渡りぬるかな［2月16日］

いずれも和歌の用例であり，＜浸して＞という意味に理解できる。『古今和歌集』の「袖ひちて」の和歌も『土佐日記』も，ともに紀貫之の作品であるから，「ひちて」と「ひてて」とが同一人物によって使われているわけであって，この事実は，いまの場合，特に重要である。ただし，それが意図的な使い分けであるかどうかについては吟味の必要がある。

この動詞は，連用形が「ひて（て）」であるから，活用の公式に当てはめれば下2段活用であり，その終止形は「ひつ」になる。一方，「ひち（て）」の方には，第5節に引用した「袖のみぞひつ」［後撰・恋5・964］のほか，「ひつを借らなむ」［夏・149］「袖ひつばかり」［後撰・雑・1177］という連体形が用

いられているから，これら二つの勅撰集の用例から帰納する限り，この動詞は4段活用と認められる。

12

前節での検討の限りにおいて，「ひち（て）」と「ひて（て）」との関係は，「立ち（て）」と「立て（て）」との関係と併行しているから，それらは，4段活用の自動詞と下2段活用の他動詞との類型的な対として使用されていたとみてよさそうであるが，ほかの文献には厄介な形が用いられている。

　眺むればおなじ雲居をいかなればおぼつかなさを添ふる時雨ぞ，斯くひつる，などいふこともやありけむ［源氏・総角］

この「ひつる」を下2段活用の他動詞とみなすとしたら，＜時雨（のように降る涙）が（袖を）こんなにぐっしょり濡らすことよ＞という意味になる。しかし，この文脈では，＜時雨（のように降る涙）で（袖が）こんなにぐっしょり濡れることよ＞という，自動詞としての解釈も成立しそうにみえる。ただし，どちらを採ろうと，袖がぐっしょり濡れていることに変わりはない。なお，『源氏物語』には，もう1例の「ひつ」が「ひちて」の形で用いられているが，それについては第17節で取り上げる。

＜袖がぐっしょり濡れることよ＞という解釈を採用する場合，下2段活用の「ひつ」に自動詞と他動詞との両様の用法があったとみなすなら，「かくひつる」は前者になる。これが一つの考えかたである。それと活用の型は異なるが，たとえば，「増す」などがそういう動詞の一つであって，「水増す」はふたとおりの意味になる。

この「ひつる」を上2段活用の連体形とみなすのが，もう一つの考えかたである。下2段活用も上2段活用も，連体形は共通しているから，具体的な用例の一々を自動詞・他動詞のいずれと認定するかは，文脈の理解のしかたにかかっており，ここでは他動詞としての用法とみなすことも可能である。ただし，そうなると，自動詞の「ひつ」として，4段活用と上2段活用とが同義で共存していたことになり，その点に問題が残される。

それほど面倒なことになるのなら，可能性を他動詞の方だけに限定しておく方が無難だという誘惑を感じないでもない。格別，それが乱暴ではないからである。

『源氏物語』の上引の例と同じように玉虫色の連体形「ひつる」が，『蜻蛉日記』にも見いだされる。第5句の「ふり」には，「降り」と「古り」とが重

ねられている。

袖ひつるときをだにこそ嘆きしか身さへ時雨のふりもゆくかな

［天禄2年9月］

「袖ひつる」は，＜時雨（のように降る涙）が袖をびっしょり濡らした＞とも，あるいは，＜時雨（のように降る雨）で袖がびっしょり濡れた＞とも，どちらにも解釈できそうである。いずれにせよ，袖はびしょ濡れになっている。

事実の客観的な把握とその事実についての解釈とは峻別されなければならない。いまの場合，連体形「ひつる」の存在は文献上に確認できる事実であり，それを上2段活用とみなすか，下2段活用とみなすかは，その事実についての解釈である。事実を評価する基準は正確さの度合であり，解釈を評価する基準は論理的整合性の度合である。

13

『万葉集』では，表音的に表記されていないが，「漬」字が伝統的に「ひつ」と訓じられており，「袖漬左右二（そでひつまでに）」［巻4・614］という連体形の例の存在を根拠に，自動詞「ひつ」は4段活用であったとするのが一般的な考えかたである。この句は字余りを許容する条件にないので，「袖ひつるまでに」と訓じる可能性は排除される。

「袖漬左右二」を「袖ひつまでに」と訓じ，つぎに，『古今和歌集』の「我が衣手のひつを借らなむ」の存在を考慮に入れ，そして，『源氏物語』や『蜻蛉日記』の「ひつる」を上2段活用の自動詞とみなせば，平安時代のなかばになって上2段活用の形が現れ，意味はもとのままで活用のしかたが変化した，という筋書ができあがる。もちろん，これもまた解釈であり，しかも，一つの解釈を正しいと前提して構築されたもう一つ上位の解釈であるから，その分だけ確度は減殺される。

『日葡辞書』（1602刊）には，つぎの項目がある。（邦訳によって示す）これによって上の解釈は補強されるようにもみえるが，あとに述べるとおり，それにも条件が必要である。

Fichi, tcuru, chita. 水など液体の中につかる。あるいは浸る。詩歌語。

辞書には，それぞれの動詞について，甲活用とか乙活用とかいう標示がなされているが，その場合，すべての活用形の存在を確認したうえで判定が下されているわけではなく，所与の活用形を，あらかじめ設定された活用の類型に当てはめて所属を判定しているにすぎない。ほかの活用形を捜し求めるまでもな

く，未然形一つからでもその認定は可能だというのが，伝統文法の基本的な立場だからである。しかし，活用形の分布は，それぞれの動詞の意味と密接に関連しており，その実態を無視して，六つの活用形を機械的に作り出していたのでは真実との距離を縮めることが難かしい。

たとえば，現代語の<呉(く)れる>と<暮れる>とは，未然形<くれ（ない）>だけによって，ともに下１段活用と判定できる。しかし，下１段活用の命令形としては<くれよ（くれろ）>が期待されるにもかかわらず，<呉れる>の命令形には<くれ>が用いられている。一方，もし，<暮れる>の命令形が使用されるとしたら，<暮れ>では絶対にありえない。こちらは型どおりの下１段活用で，<暮れよ（暮れろ）>である。

命令形だけに生じたこの分裂は，さほど古く遡るものではない。たとえば，天草版『エソポの寓話集』(1592年刊）には，「我に curei（くれい)」となっている。その後になって，どうしてこの動詞の命令形語尾が脱落したのかは，この動詞の意味を考慮することなしには説明できない。ともあれ，こういう不規則性が見いだされる以上，現代語の<呉れる>を無条件に下１段活用と認めるのは不当である。こういった事実が無視されて，きれいごとの活用表が作られても，意味がない。

14

ここに「ひつ」として扱った動詞には，連用形・終止形および連体形の三つの活用形しか見いだされていないが，資料の幅を広げることによって，活用表の空欄をすべて埋め尽くせるであろうとは期待しにくい。動詞の各活用形は均等に使用されるものではなく，連用形の比率が特に高いのが一般的な傾向だからである。たとえば，「老ゆ」「凍(こ)ゆ」「肥ゆ」「冴(さ)ゆ」「萎(な)ゆ」「そびゆ」といった類の状態性の動詞群は，他の動詞や「て」「たり」に前接する用法を基本としているために，事実上，連用形以外の活用形が用いられていない。また，連用形と連体形とで用例のほとんどが占められている動詞や，連用形を中心にしながら各活用形にわたって使用されている動詞もある。

事実上，連用形専用といってよい動詞の一つとして「老ゆ」を挙げたが，青表紙本『源氏物語』には，連用形が32例，未然形が１例，三巻本『枕草子』には連用形が16例となっている。『徒然草』にも，連用形が19例で，そのほかの活用形は１例もない。『源氏物語』にみえる未然形はつぎのような文脈の中に用いられている。

『などてかさもあらむ，老いくづほれたる人のやうにも宣ふかな』と宣へば，『老いねどくづほれたる心地ぞするや』と独りごちてうち涙ぐみてゐ給へり［少女］

＜年をとって弱よわしくなってしまった人のようなおっしゃりかたですね＞ということばに対して，＜年はとっていないが，がっくりした気分だ＞と答えている場面である。「老いたらねど，くづほれたりや」とでもいうところを，「老いくづほれたる」を受けたために，たまたま未然形が顔を出したのであろう。普通にそれが使われていたのではなく，連用形をもとに類推で造り出したのが「老いねど」であったと考えたい。

ただし，終止形の「老ゆ」も，あながち幻ではない。たとえば，観智院本『類聚名義抄』には3例の「オユ」が見いだされるからである。「老」字の和訓「オユ」もその一つで，これには《平上》の朱声点が加えられている。凡例によると，朱声点のある和訓は確実な典拠から引用されているとのことなので，この「オユ」も，信頼性の高い訓点本などから引用された形とみなさざるをえない。しかし，この字書においては，活用語の場合，「オイテ」とか「オイタル」とかいうなまの形の傍訓から動詞の部分だけを取り出して終止形に改め，それを和訓として挙げるという方針が認められるので，この「オユ」もまた，おそらく，連用形から演繹的に導かれた形と考えられる。終止形には相違ないが，実際に用いられていた語形であったかどうかは極めて疑わしい。

観智院本『類聚名義抄』とほぼ同時期に成立した三巻本『色葉字類抄』には，この動詞が「オイタリ」の形であげられている。この辞書は和語に当てるべき漢字を検索するためのものであり，したがって，検索の手がかりとなる形を「オイタリ」としていることは，終止形の「老ゆ」が実在しなかったことを示唆している。

15

前節の検討に基づいて，「ひつ」について考えてみよう。第3節に指摘したように，原本系の図書寮本『類聚名義抄』には，「漬」字の和訓として「ヒチテ」があるが，改編本系の観智院本では，「漬」字の項に，それに対応すべき和訓が収録されていない。改編本では，原撰本の和訓を踏襲したうえで新しく増補する方針をとっているが，『白氏文集』を出典とする正統の和訓「ヒチテ」を，例外的処置として削除しているのは，漢文訓読語としてふさわしくないと判断したからであろう。

三巻本『色葉字類抄』には，「ヒツ」の項がない。どの辞書にも落ちや漏れがありうるであろうが，丹念に編纂された『色葉字類抄』にそれがないのは，その語に当てるべき漢字が検索される可能性を編者が計算に入れていなかったためとみるのが順当である。『日葡辞書』に「P（詩歌語）」と注記されている事実は，その間の事情を物語っている。

16

動詞「ひつ」を和歌専用の語として規定した場合，二つの事柄について説明が必要になる。その一つは，和歌専用の「ヒチテ」が，原撰本系の『類聚名義抄』にどうして採録されているのかであり――それは，どうして『白氏文集』の訓読にこの語が用いられたのかということでもあるが，――，もう一つは，『源氏物語』において，和歌以外の部分にこの動詞が用いられている事実をどう考えるべきかである。

図書寮本『類聚名義抄』の「漬」字の項には，「ヒタス」と「ヒツ」とが，いわば，一対としてあげられているから，ここにおける「ヒツ」の意味は＜浸る＞であったとみなしてよい。

「朽つ」と「朽たす」とのような関係から類推すると，「浸す」に対応する自動詞形は4段活用の「ひつ」であり，その連用形は「ひち（て）」になる。一方，「渡る」と「渡す」とのような関係からは，「浸す」に対応する自動詞として「浸る」が導かれる。したがって，それらは，【第1表】に示す関係にあったことになる。

自動詞	他動詞	自動詞
くつ	くたす	
ひつ	ひたす	ひたる
	わたす	わたる

【第1表】

このようにして，他動詞「ひたす」は，対応する自動詞として，「ひつ」と「ひたる」との二つを持つことになったが，図書寮本『類聚名義抄』には，「ヒチテ」の方が採録されている。その語形は，『万葉集』以来の和歌の用語と同じでありながら，意味の幅や用域が「ひたる」に一致していたところから，結局，漢文訓読用語として定着しなかったのかもしれない。そうだとしたら，漢文訓読語としての「ヒツ」は，「ヒタル」との競合関係において捨てられたことになる。

観智院本『類聚名義抄』では，「ヒチテ」が削除される一方，「ヒタル」が増補されている。「ひつ」は和歌の用語，「ヒタル」は漢文訓読用語という認識に基づいているのであろう。構文に関わる要因を除いて，漢文訓読用語は日

常語を基盤にしているから，これは，『拾遺和歌集』の賀の歌の詞書における「ひたる」の使用とも矛盾しない。

三巻本『色葉字類抄』では，「ヒタス」の項にいくつもの漢字があげられているが，そこに「ひたる」が併記されていない。これは，「ひたる」が完全な市民権をまだ獲得していなかったからではなく，「ヒタル」を求めて検索した場合でも，当該個所に「ヒタス」があれば，当てるべき漢字は共通しているので，「ヒタル」を書き添えるに及ばないからにすぎない。ただし，「ヒツ」もまた同じ理由で省略されているとは考えがたい。

17

残されたもう一つの問題は，『源氏物語』の二例の「ひつ」が，いずれも和歌以外の部分に用いられている事実を，どのように説明すべきかである。

そのうちの一つは，第12節にあげた「かくひつる」で，これは，和歌に添えられた補いのことばである。和歌の外（そと）に位置している部分は，会話の文として扱われるのが通例であるが，この物語の文章の場合，このような形式による言い添えは，用語の面においても和歌の圏内に含まれうるとみなすべきである。

説明を要するもう一つの例は，寵愛する更衣が病没した後における御門の悲しみを描いた場面で，つぎのような文脈の中に置かれている。

> ほど経るままに，せむかたなう悲しう思さるるに，御方がたの御とのゐも絶えてし給はず，ただ涙にひちて明かし暮らさせ給へば，見奉る人さへ露けき秋なり［桐壺］

「涙にひちて」とは，文脈から，「涙に袖ひちて」ということであるから，ここも，和歌における用法と変わりがない。「見奉るひとさへ露けき秋なり」という表現も散文的ではない。また，このすぐ前には，「なくてぞとは，かかる折にや，とみえたり」という一節があり，その「なくてぞ」は，つぎの古歌を響かせたものとされている。

> 在るときはありのすさみににくかりき　なくてぞ人は恋しかりける

主情的な叙述に和歌の用語や表現を適切に織りこみ，雰囲気を詩的に盛り上げることは，この物語の文体の大きな特色の一つである。そういう構図の中に置いてみれば，「涙に濡れて」という散文的な表現よりも――あるいは，散文と共通する表現よりも――，「涙にひちて」という和歌特有の表現の方が，はるかに効果的であり，そのために，この動詞がここに選択されていると考えてよさそうである。

『源氏物語』の「涙にひちて」は，『古今和歌集』などにみられる前代の用法の不正確な模倣であるとみなすのが，もう一つの立場かもしれない。すなわち，動詞「ひつ」が観念的にしか理解されなくなっていたために，紫式部がこれを「濡る」の同義語として散文の中に使用しているとみる考えかたである。しかし，そのような読みかたをしたのでは『源氏物語』の文体が理解できないし，また，文章のこくを味わうこともできないであろう。頻用される語ではないから，たまたま，和歌の中に使用する機会がなかっただけで，この作者にとって，「ひつ」が散文の用語であったとは考えられない。

18

「老ゆ」の終止形は，独立した形として平安時代の漢和字書に姿を見せているが，「ひち（て）」の終止形は，終止形接続の助動詞と結び付いて，「浅みこそ袖はひつらめ」[618] という形で現われている。ところが，その連体形として，「ひつ」と「ひつる」との二つがあるために，両者の関係に説明が必要になった。この絡みあいについては，すくなくとも，ふたとおりの解釈が成り立ちそうにみえる。

「ひつ」は使用頻度が低いうえに，その大部分が連用形によって占められている。その連用形「ひち（て）」が，4段活用と上2段活用とに共通しているために，後者からの類推によって，連体形「ひつる」が導き出される可能性があった。

下2段活用の他動詞「ひつ」が健在であったなら，衝突を回避して，自動詞の連体形としては4段活用の「ひつ」が導かれたはずである。したがって，自動詞の連体形として「ひつる」を生じていることは，下2段活用の他動詞が衰退していた事実を示唆している。使用頻度の低い和歌専用語で，知的に学習されなければならなかったことが，こういう混乱の最大の原因であった。これが第一の解釈である。

自動詞と他動詞との区別を，意味の対立に基づく絶対的な枠づけと考えずに，もう少し柔軟にとらえてみようというのが，第2の解釈の立場である。伝統文法の共通理解に合致しないために，その意味で非常識になるかもしれないが，言語の実際的な運用のありかたからみるならば，いちおうは検討に値するであろう。

動詞「ひつ」については，4段・下2段・上2段の各活用が問題になるが，実例の見いだされる三つの活用形についてそれらの関係をみると【第2表】の

ようになっている。

下2段活用の「ひつ」は，『土左日記』あたりにその片鱗をのぞかせているだけのように，一般には考えられているが，【第2表】にみるとおり，その終止形は，他の二つの活用と共通しており，また，連体形は上2段活用のそれと同じ形であるから，これまでと違う解釈の成立する余地がある。すなわち，自動詞と他動詞との意味上の対立が曖昧になったために——あるいは，最初からその対立が曖昧であったために——，4段活用の連用形が下2段活用の用域をも覆うようになり，また，連体形においてはそれと逆に，下2段活用が4段活用の用域を覆うようになったために，平安時代初期の連用形「ひて（て）」を整理して，『源氏物語』や『蜻蛉日記』などの成立した時期におけるこの動詞の活用は，【第3表】に示す状態を呈していたと考えるわけである。

	連用形	終止形	連体形
4段活用	ひち—	ひつ—	ひつ
上2段活用	ひち—	ひつ—	ひつる—
下2段活用	ひて	ひつ—	ひつる—

【第2表】（平安時代初期）

連用形	終止形	連体形
ひち	ひつ	ひつる

【第3表】（平安時代中期）

これを単一の動詞とみなして古典文法の枠ぐみに当てはめれば，上2段活用として単純に分類されることになるが，その成立過程は，助動詞「ず」などと同様，二つの動詞の hybrid として説明すべきである。その点だけに関していえば，英語の動詞 “go, went, gone” などの例を引き合いに出すことが許されるかもしれない。この想定にもそれなりの筋道が立てうる以上，記述を斥けて既成の枠ぐみを優先させるべきではない。

19

動詞「ひつ」は和歌専用の語であったから，しばしば，縮約された表現の中に用いられている。「袖ひちて」もそういう場合の一つであって，次節に述べるように，作者の明確な意図として，＜袖がぐっしょり漏れて＞と＜袖をぐっしょり漏らして＞との違いがどこまで区別されていたのか，疑わしいところがある。

第4節に引用したとおり，『僻案抄』には，「今の世の歌には詠むべからずとぞいましめられし」と記されている。『古今和歌集』には普通であっても，

すでに『後撰和歌集』にはあまり用いられなくなっているほどで，もはや事実上の廃語であるから，という理由であろう。「浸る」「浸す」の干渉による誤用の危険性への警戒があったかもしれない。これは，定家の父，藤原俊成の『古来風体抄』につぎのように述べられている事実とも符合している。

> この歌，古今にとりて心も詞（ことば）もめでたく聞こゆる歌也。ひちてといふ詞や，今の世となりては，すこし古りにて侍らん。つも・かも・べらなりなどはさることにて，それよりつぎつぎ少しかやうなる詞どもの侍るなるべし［下巻］

『源氏物語』や『蜻蛉日記』のような，すこしあとの時期の作品では，『古今和歌集』などの和歌にみえる「ひつ」の意味を文脈に適合するように解釈し，その理解のしかたに基づいて使用しているために，自動詞とも他動詞ともとれる玉虫色の用法になっており，また，活用にも交錯が見られるものと考えられる。

「漏る」と「漏らす」，「浸る」と「浸す」との二つの対は，4段活用の「ひつ」と下2段活用の「ひつ」との対と併行する関係にあったが，それらにおいては，たがいに他の領域をおかすことなく，今日まで，本来的な対立を保持している。対になる二つの動詞が同一の活用形を共有していないために対立がつねに露出していることと，それらが日常語であったこととが，いちおう，その理由として考えられる。それを裏がえせば，「ひつ」の方に交錯を生じた原因も説明が可能である。しかし，次節に述べる理由はさらに決定的である。

20

外形上，下2段活用の「ひつ」と断定できるのは，『土佐日記』に用いられた連用形の2例であるが，すでにその段階において，自動詞と融合する要因を含んでいる。もう一度，それらを引用してみよう。

> 手をひてて寒さも知らぬいづみにぞ汲むとはなしに日ごろ経にける
>
> ［2月4日］
>
> 天雲の遙かなりつる桂川　袖をひてても渡りぬるかな［2月16日］

「手をひてて」は意図的に手を浸すことであって，他動詞的用法と認めて問題がない。しかし，「袖をひてても」の方は，意図的にびっしょり濡らす行為だとは考えにくい。

2月16日の和歌は，土佐からの長旅を終えて京の入口に着き，懐かしい桂川を月明りの中に渡ったときの作で，「袖をひてても」というこの表現に，われ

われはいくつかの異なる意味を読み取ることができる。それらは，相互に矛盾する関係にあるわけではない。

桂川を渡るときに，裾はもとより袖までもぐっしょり濡れることぐらい，分かっていたはずである。しかし，理屈はともかくとして，ここでは，一刻も早く京の街に着きたい一心で，袖を濡らしてでも川を渡ってしまった，という表現をとったと解釈することができる。それで意味がよくとおるし，他動詞という線を崩す必要もない。

嬉しさのあまり夢中で渡り終えて気がついたら，袖がぐっしょり濡れていたということでも，この「袖をひてても」は解釈できそうである。びしょ濡れになっているのも知らないほどに興奮していたとか，これは夢ではないとか，含みにも幅がありうる。こうなると他動詞ということが怪しくなってくるが，袖を濡れるにまかせたという表現として，いちおう，つじつまが合わせられないでもない。

袖が桂川の水に浸ったことは事実であるが，喜びの涙も袖を濡らしたに違いない。したがって，「ひてて」の主語は，作者自身でもありうるし，また，涙でもありうることになる。この和歌では「袖をひてても」という下2段活用の形をとっているが，4段活用の用例の多くが，涙に袖を濡らす場合に用いられているから，そして，ここは感激の涙を流して当然の場面であるから，このような解釈も無理なく成立しそうである。ただし，ここまで来ると，自動詞との距離は，事実上，解消してしまう。

要するに，動詞「ひつ」が「袖」について用いられる場合，4段活用であろうと下2段活用であろうと，強く意識されるのは，袖がぐっしょり濡れていく過程ではなく，袖がぐっしょり濡れているという，結果としての状態である。そのことを確認するために，第22節に，現代語の例について検討してみる。

他動詞ということにこだわると，桂川の水にわざわざ袖を浸して喜びをかみしめたという解釈が出てくるし，それが文法に抵触するわけでもない。硬直した文法至上主義は，むしろ，そういう解釈を支持しかねないが，正常な言語感覚の方が優先する。

21

「袖をひてても渡りぬるかな」から連想されるのは，第6節に引用した「浅みこそ袖はひつらめ」という表現である。この「ひつ（らめ）」は，4段活用または上二段活用と認められているが，終止形「ひつ」は下2段活用とも共通

しているから，その認定の当否について検討してみる必要がある。その場合，「浅み」の意味を確定しておかなければならないが，これについては，伝統的に二つの解釈がある。一つは，<浅い場所>であり，もう一つは，<浅いので>であるが，ここは，つぎの和歌における用法と同じとみなして，<浅い場所>の方を採ることにする。

浅みにや人は下(お)り立つ我が方(かた)は身もそほつまで深きこひぢを［源氏・葵］

「浅みこそ袖はひつらめ」とは，<浅い場所なら（流れが）袖がびっしょり濡れる（程度ですむ）だろうが>なのか，<浅い場所なら（流れで）袖をびっしょり濡らす（程度ですむ）だろうが>なのかは，判断が難しい。前者なら自動詞で4段活用，後者なら他動詞で下2段活用とみなすのが公式どおりの認定であるが，さしあたり，留保せざるを得ない。これを下2段活用とみなせば，『古今和歌集』においては孤例になるが，そのことを理由に4段活用に仲間いりさせて，きれいな形に処理してしまうのも躊躇される。

前節における考察の結果からするならば，そのような迷いに陥るのは，形骸的な文法の枠づけに振り回されている証拠である。文脈上，どちらとも決めかねる用例は，本来，はっきりした区別のない用法だからであって，無理にどちらかに寄せて解釈してしまったのでは，ほんとうの姿が見うしなわれてしまうであろう。繰り返すなら，「袖」と結び付いて用いられた動詞「ひつ」は，濡れている状態に――すなわち，過程でなしに結果の方に――焦点が置かれており，濡れたのか濡らしたのかは，それを使った人物にとってどうでもよかったと思われる場合が少なくないから，読む側もそのつもりで読めばよい――あるいは，そのつもりで読まなければならない――，ということになる。

定家は『僻案抄』において，「袖ひちて」の「ひつ」を，「ひちてとは浸してといふ心也」と説明しているが，それは，この語を日常語で置き換えるとしたら，「浸る」よりも「浸す」の方が，いっそう自然であると感じたからであろう。文法の立場からそれに目くじらを立てるとしたら，あまりに柔軟性に欠けている。むしろ，「浸して」では，どっぷり浸けたことになるから，この場合には，「しとどに濡らしてといふ心也」とでも説明した方が，いっそう適切だったのではないか，というあたりが問題になりうるかもしれない。

22

古典文学作品の用語や表現のありかたは現代語のそれとまったく異質であると考えずに，基本的にさほどの違いがなかったという仮定のもとに，「ひつ」

における自動詞と他動詞との混淆の問題を検討してみよう。

(1) ズボンがどろどろに汚れて働く*。

(2) ズボンをどろどろに汚して働く。

「汚れて」の方は不自然であり，その形では実現されないであろうが，ともかく，(1)と(2)とによって理解される内容は，事実上，同じであるといってよい。「どろどろに」の方に表現の重点があるために，ズボンが泥で汚れたのか，ズボンを泥で汚したのか，あるいは泥がズボンを汚したのか，といったことはどうでもよくなっている。いわば，自他の対立の解消である。つぎのような対を作って比較してみても関係は変わらない。

(3) ズボンがどろどろになって働く。

(4) ズボンをどろどろにして働く。

「ひち（て）」と「ひて（て）」とは，自動詞と他動詞との関係にあったが，いずれも，＜びしょびしょに＞という意味を含んでおり，「袖」と結びついた用法においては，びしょびしょに濡れている状態だけに関心があるために，自他の対立が実質的に失われてしまい，両者の活用までが混淆するに至ったものと考えられる。

23

第2句の「掬ぶ」は，両方の掌を合わせて水をすくう動作をさしている。したがって，「袖ひちて掬びし水」とは，＜袖をびしょ濡れにしてすくった水＞であるが，大切なのは，それが，どういう水だったかについての解釈である。

第2節に紹介した四つの口語訳のうち，①＜袖の濡れるのもいとわずに，手にすくって楽しんだ山の清水＞というのは，解釈に踏みこんでいるが，この口語訳も，肝心のところで意味が明確でない。これでは，夏の日ざかりに冷たい水の感触を手で楽しんだだけのように読みとれる。作者がその水を飲んだかどうかに注釈者の関心は向けられていないが，「飲む」という動詞がこの和歌の表面に出ていなくても，水をすくったのはそれを飲むためだったと考えるのがいちばんすなおであろう。

袖をかばうぐらいのことは，だれでもするであろうから，地形や足場の条件がどうであろうと，気を配りさえすれば，袖は濡らさずにすんだはずである。したがって，袖がびしょびしょ濡れになっていたのは，袖を顧みる余裕がなかったからである。きれいな湧き水を無我夢中ですくって飲み，人心地がついてみたら，袖がびしょびしょになっていたということである。遊びに出たこどもが服

をどろどろに汚して帰ってきたというのは，遊びに熱中して母親の注意などすっかり忘れ，気がついてみたら服がもうどろどろに汚れていたということにほかならない。

どれほど喉が渇いていても，水がきれいでなかったら，ためらいを感じたであろうし，飲む際にも袖をかばうのを忘れなかったはずである。「袖ひちて」とは，それほどまでに喉が渇いており，また，山の井の水がそれほどまでに清冽であったことを含意している。恋の苦しみに流す涙にしても，袖をかばうだけの気持の余裕はなく，あとになって，ぐっしょり濡れた状態に気づく点において，これと同じことである。

定家は「浸してといふ心也」としているが，涙からの類推としてとらえるなら，ここは，湧き水に袖がどっぷりと漬かってしまったわけではなく，掬んだ手の間から漏れ落ちた水が肘を伝って袖を濡らしたとみる方が自然である。つぎからつぎへとその動作を繰り返したために，どっぷり水に漬かったようになってしまったということである。「袖ひちて掬びし水」とは，思いきった意訳をすると，＜我を忘れて，飽くことを知らずに，ひたすら飲みつづけたあのおいしい清水＞ということになる。もちろん，水に気をとられて袖をどっぷり，という可能性も排除できないが，それならそれで，基本的な解釈に変わりはない，いずれにせよ，季節は真夏である。

24

「袖ひちて掬びし水の凍れるを」という部分が，第1節に紹介した口語訳の一つには，＜～水の，氷っているのを＞と置き換えられている。このような語法を，伝統文法では同格と呼んでいる。《同格》の「格」の規定は必ずしも明確でないが，ともかく，その条件に当てはまる事物が，ある範囲にわたって存在する場合，指す対象を狭く限定するための，表現の型として説明されている。すなわち，＜鉛筆＞といっただけでは，さまざまの鉛筆があるので，＜鉛筆の長いの＞とか，＜鉛筆の硬いの＞とかいう表現がとられるということである。この例がそれに該当するかどうかを検討してみよう。

「袖ひちて掬びし水」とは，＜過ぎ去った夏の日のあの水＞であるから，冬になれば凍っている。一方に凍っていない水も同時にあるわけではないから，選択の余地はない。したがって，これが，＜鉛筆の長いの＞と同じ限定のしかたではありえない。＜沸騰した湯の熱いの＞という言いかたも同格の一種であろうが，沸騰していることは熱いことを無条件に意味しているから，強調ない

し確認であって，これを「袖ひちて掬びし水の凍れるを」という表現と同じに扱うのは妥当でない。

25

「袖ひちて掬びし水の凍れるを」が，いわゆる同格表現に該当しないことを確認しておくだけで，当面は十分であるが，ついでに，同格というとらえかたについて，見解を述べておきたい。同格という考えかたは，＜鉛筆の長いの＞と＜長い鉛筆＞とが等価の表現であることを含意しており，現にそのように説明されるのがつねであるが，そういうとらえかたの是非が問題だからである。

『伊勢物語』（第9段・東下り）のつぎの一節は，典型的な同格の例とされている。東国に下った業平は，あまりにも寂れた環境にあって，京と，そして京に残してきた女性とを思う心がしきりである。いま，隅田川を渡ってさらに奥の地へと旅を続けようとしているかれの目に，見慣れない鳥の姿が映る。それが，この場面である。

白き鳥の嘴（はし）と脚（あし）と赤き，鴫（しぎ）の大きさなる（水のうへに遊びつつ魚（いを）をくふ）

同格という概念を導入するならば，原文の表現を，つぎのように言い換えても，それらはすべて等価の表現とみなされる。しかし，そのような感覚で読んだのでは，とうてい，表現の機微に迫ることは期待できないであろう。

鴫の大きさなる白き鳥の，嘴と脚と赤き

白き鳥の，鴫の大きさなる，嘴と脚と赤き

嘴と脚と赤き鳥の白き，鴫の大きさなる

こういう場合，対象の基本的なとらえかたに，いまも昔も変わりがあろうはずはない。まず，最初に目を引かれるのはその鳥の白さである。よく見ると，全身が白一色ではなく，くちばしと脚とは赤い色をしている。業平は，ここで，その鳥を既知の水鳥に同定しようとするが，これと同じ，あるいは，これに似た鳥は見たことも聞いたこともない。大きさだけはシギぐらいだがシギではない。いったい，なにをしているのかと見ていると，遊泳しながら魚を取って食べている，ということである。

はじめにその白さが目をとらえ，さらに細かく観察して，なんという鳥かを見きわめようとし，そして，最後に，その鳥の動作に関心をいだく，という自然な順序を追って叙述されているから，文学作品の表現として，この順序を入れ換えることは許されない。入れ換えた形を，どれも原文と等価の表現だと認めてしまったのでは，文章の動的な流れが完全に破壊されて，鳥類図鑑の解説

になってしまう。

大きさだけの比較であれば，対象はどんな事物でもよいはずであるが，引き合いに出されているのが鳥であり，しかも，ハトやウズラなどではなく水鳥のシギであるところに，僻地に住むこの鳥を，京で自分の知っていた鳥になんとか結び付けたいという業平の心中を――ないしは，そのように描写した作者の心くばりを――，読みとるべきである。

＜鉛筆の硬いのが欲しい＞という場合，表出者の脳裏に最初に浮かんだのは＜鉛筆が欲しい＞ということであり，＜硬いの＞は追加された条件であるから，堅いのがなければ柔らかいのでも，という譲歩の余地が残されている。それに対して，＜硬い鉛筆が欲しい＞という表現によって求められている第一の条件は硬さであって，それがなければ柔らかい鉛筆で間に合わせてもよいという含みは，本来的に――あるいは，ほとんど――，ないといってよい。定義が明確であれば，どのよう術語の使用にも積極的には反対しにくいが，このような《同格》関係をもって，表現としても等価とみなすのは短絡である。

26

古典文法は，基本的に，散文と韻文とを区別しない形で構成されているが，「袖ひちて掬びし水の凍れるを」という表現が，そういう文法によって過不足なく説明できるとは限らない。

「袖ひちて」という状態で山の井の水を満喫したのは真夏の出来事であり，その水が凍っているのは真冬の状態であるが，半年間にわたる時間の経過は，いっさい，ことばに表わされていない。したがって，われわれは，その期間に起こったはずの，明示的に語られていないさまざまの事柄を，想像で補わなければならない。というよりも，なにも表現されていないばかりに，あらゆる事柄を補って読み取ることができる。

暑い夏が終って初風が吹き，多彩な秋が訪れる。その豊かさを享授しているうちに，いつか，耐え忍ぶべき厳しい冬が到来する。その間には，「七夕」「月」「秋萩」「をみなへし」「時雨」「紅葉」「白露」「菊」「初霜」「白雪」といった数々の和歌のキーワードが，顕在化されることなしに――むしろ，一つも表出されていないばかりに，かえってそのすべてが確実な潜勢力を蓄えて――ぎっしりと埋めこまれている。読む側のファンタジーによって，それは，どのようにでも染め上げることが可能である。「むすぶ」から「解く」への移行も，その染め上げの過程に自然な形で参与している。

「袖ひちて掬びし水の」と「凍れるを」との間に介在する秋と冬との内容は具体的に特定できない。この和歌の上の句は，もはや同格とか主述関係とかいうたぐいの通常の文法用語によって説明しうる――あるいは，説明すべき――範囲を超えた，いわば，超文法的な表現になっている。たとえば，「目には青葉，山ほととぎす，初鰹」という句が，すくなくとも常識的な意味において，理解可能であるにもかかわらず，その構成を通常の文法規則によって説明しようとする努力が実を結ばないのと同じことである。ここに省略という便利すぎることばを持ちこんだのでは，事の本質が見のがされてしまう。

27

「春立つ今日の風や解くらむ」という下の句については，どの注釈書の口語訳も大同小異である。この部分の表現は古典文法によって説明可能でり，＜立春の今日の風が解かしているだろうか＞といった口語訳にも特別の問題がないようにみえる。しかし，口語訳がそのまま解釈ではありえない。

注釈書の類には，古くから，『礼記』（月令）の「立春日，東風解凍」という一節が引用されてきている。しかし，かりに，この和歌が，そのことばを出典として，あるいは，そのことばに示唆を得て，作られているとしても，この和歌の解釈にとって，それが決定的な意味を持ちうるわけではないから，このことばと結び付けることによって，基本的な解釈がついたと判断するのは早計である。ここで考えなければならないのは，立春に風が吹いてあの山の井の水を解かしているとしたら，それが作者にとってどういう意味を持っているのかということである。中国の典籍には，立春の日に東風が凍結を解くとあるから，いまごろは，そのとおりに風があの山の井を解かしているだろうか，というだけのことでは，形式だけが韻文でも内容は散文なみである。「～や～らむ」という表現によって意図されているのは，もっと繊細な心情でなければならない。

＜いよいよ春になったのだから，当然、あの水は流れだしてよいはずだが，いったい。なにがそのきっかけを作ってくれるのだろう＞という疑問が先行して，＜それを解かしてくれるのは，きっと立春の今日の風ではないだろうか＞と想像することによって，長く苦しい冬からの解放を喜び，新しい年への希望を表明しているのが下の句の表現であると小論の筆者は解釈する。凍結していた山の井が解ければ滾々と流れはじめる。いまはまだ寒いが，やがて暖かくなり，そして暑い夏がやってくる。夏になったら，また汗を流しながらあの場所

に行き，山の井の水を思う存分に飲んで渇きをいやし，暑さを忘れてみたいものだというのが作者の心であろう。

『礼記』の一節が解釈に介入するとしても，＜そういえば中国の典籍にも～とあるのだから＞ということであり，それによって，この和歌に，広がりは出てくるが，表現の中核がまさにそこにあるとみなしたのでは，pedantry による歪曲になる。この小論において導かれた解釈が正しいかどうかはともかくとして，そういうわくわくしたときめきをこの表現から感じ取らなければ，待ちに待った立春の日の作の解釈にはなりえないであろう。詞書の「春立つ日」と，そして，第4句の「春立つ今日」とには，そういう弾んだ響きがこめられている。

一首の中に一年を詠みこんでいるところに，この和歌を特徴づける技巧があるといわれてきている。しかし，ここで大切なのは，一年をどのように詠みこんでいるかについての見きわめである。極端に縮約された，飛躍を含む上の句の表現によって過ぎ去った半年を懐かしく回顧し，これからへの期待を下の句に提示するという，ことばの動的な運用の巧みさがこの和歌の生命であると筆者は考えたい。

【参考論文】

山内洋一郎「動詞“漬つ”について」（『国語学』第59集・1964年12月）

【あとがき】

①雑誌や紀要の論文を調べていないので，部分的な再論の恐れがある。②『伊勢物語』9段の例について，かつて森野宗明氏と雑談し，大筋で意見が一致した。ただし，第25節に述べた解釈は小論の筆者による敷衍である。森野氏の見解が別に公表されることを期待したい。③「活用の種類について，自動詞の四段活用が上二段活用に転じたのは，平安中期以後といわれている。連用形は四段活用か上二段活用か確定できないが，中古以降の例は便宜上二段活用に含めた。」（『日本国語大辞典』小学館，1975年，「ひ・ず」補注）。（古くは「ひつ」）とあるが，活用標示は≪自ダ四≫≪自ダ上二≫≪他ダ下二≫である。用例に濁点はない。「ひ・つ」の項は，「⇨ひず（漬）」となっている。